Japanese Association of Educational Psychology

The Annual Report of Educational Psychology in Japan
2000, Vol. 39, 146-161

展　望

人生を物語ることの意味
—なぜライフストーリー研究か？—

やまだようこ
（京都大学）

PSYCHOLOGICAL MEANINGS OF TELLING AND RE-TELLING LIFE STORIES

Yoko YAMADA
(Kyoto University)

In the present article, I review recent life-story research, and argue the theoretical and methodological issues, especially from the point of view of life-span developmental psychology. First, a definition of "story" is "describing the plot of two or more life events". Life stories are acts of meaning and organizations of life experiences. Second, life stories can be understood not as static structures, but rather in terms of the dynamic process of interaction of the story-teller and the listener. In particular, it seems that re-telling one's life story is essential for generating new meaning of one's life. Though we cannot change past events, we can reorganize them as we re-tell the story. Third, the concept of a narrative self is related to the concepts of identity and generativity. Telling one's life story is a significant tool for communication from this generation to the next and future generations.

Key Words : life story, life-span developmental psychology, re-telling, narrative self, generativity

この論文では，最近のライフストーリー研究を展望し，特に生涯発達心理学の観点から，理論的・方法的問題を論じる。第1に，「物語」は「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義される。人生の物語とは，意味づける行為であり，人生経験の組織化である。第2に，人生の物語は，静態的構造ではなく，物語の語り手と聴き手によって共同生成されるダイナミックなプロセスとしてとらえられる。特に，物語の「語り直し」は，人生に新しい意味を生成する行為として重要だと考えられる。私たちは，過去の出来事を変えることはできないが，物語を語り直すことによって，過去の出来事を再構成することが可能になるからである。第3に，「物語としての自己」の概念は，アイデンティティやジェネラティヴィティ（生成世代性）の概念と関連づけられる。人生の物語を語ることは，現世代から，次の世代や未来世代へのコミュニケーションの重要な道具となる。

キーワード：ライフストーリー，生涯発達心理学，語り直し，物語的自己，ジェネラティヴィティ（生成世代性）

われわれは，あまりよく知らない人との関係を物語るときでも，われわれの生涯に見た種々，さまざまな風景を，次々と登場させないわけにはゆかないだろう。こうして各人は——私自身もそのなかの1人なのだが——単に自分を軸にしてぐるりと回転しただけではなく，他人のまわりをもぐるりと回転することによって，とりわけその人が私に対して次々と占めた位置によって，どれほどの時が私に流れたかを示しているのだった。今しがたこのパーティで〈時〉をとらえ直してからというもの，〈時〉はさまざまな場面にしたがって私の生涯を配列しながら，1つの生涯を物語ろうとする書物においては，普通に人が用いる平面心理学とは逆に，一種の立体心理学といったものを使用すべきであろうと考えさせるのであった……。（プルースト，M『失われた時を求めて』）

1　ライフストーリー研究とは？

1-1　物語の定義

人生の物語（life story, narrative of life）研究とは，日常

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

生活で人びとがライフ（人生，生活，生）を生きていく過程，その経験プロセスを物語る行為と，語られた物語についての研究をさす。本論では，両者を含めてライフストーリー研究と呼ぶ。

ライフは，人生，生涯，生活，生，いのち，生命，生き方を意味する。心理学は，今まで正面から扱ってこなかったライフと切り結ぶ学問に変貌しつつある。たとえば発達心理学は，生涯（life-span）発達心理学に変わり，人生全体を長い時間軸でとらえることによって，ものの見方と方法論を変革しつつある（Baltes, P.B., 1987；Elder, G.H., etc., 1993；小嶋，2000；Levinson, D.J., 1978；高橋・波多野，1991；無藤・やまだ，1995；南・やまだ，1995など）。この小論では，特に「ストーリー」に焦点をあてて，心理学における物語的アプローチの意義について，基本的な考察を行う。

ここでは「物語」を，「２つ以上の出来事（events）をむすびつけて筋立てる行為（emplotting）」と定義する。

リクール（Ricour, P., 1983, 1984, 1985）は，アリストテレスの『詩学』から，物語の本質は，登場人物ではなく筋立て（ミュトス）にあると考えた。筋立てとは，出来事の組立てのことである。

物語論（narratology）の系譜では，文学作品の構造を支配している一般法則を，形式（フォルム）から知ろうとしてきた。筋立ては，ロシア・フォルマリストのシクロフスキーたちが，ファーブラ（物語の素材。人間関係，事件などを含めた諸出来事）に対してシュジェート（物語の形式。出来事の配列，物語り方）と呼んだものに対応する。

しかし，私が考えるのは，彼らが考えた静的な「構造」や「形態」としての筋ではなく，語りが絶えずつくられ組み替えられるライヴ（生きた）生成プロセスとしての筋立てる行為である。したがって，構造としての物語ではなく，生成的物語，つまりライフ（生，人生）を変化させていく物語を考えている。

ヴィゴツキー（1968）の巧みな比喩によれば，ファーブラは「建築材料」つまり詩人にとっての言葉，音楽家にとっての音，線画家にとっての線であり，シュジェートは「素材の相互関係，構成」つまり詩行，メロディー，輪郭にあたる。２つの事件や行動が結合して，順序配列が変わることで，新たな動的関係ができるのである。

ヴィゴッキーは，芸術家が，出来事の単純な年代順の配列に満足せず，物語の直線的展開を避けて，２点の最短距離を進むかわりに曲線を好むのは何のためなのかと問うている。そして「解剖学のような物語の静的な構成図ではなく，生理学のような物語の動的な構成図」を考え，「物語の真の生命を明らかにして，物語の死んだ構造を生きた有機体へ」変えたいと述べている。

彼の文章は，（　）の言葉を入れ替え，ここの「筋書き」に入れると，本論の主旨にあう生成的物語の方法論として生かすことができよう。（　）の改変は，やまだによる。このようなテクストの読み替え，改編，意味の変成は，「物語」を絶えざる生成作業にする実践である。

物語を語る（作る）さいに表現された人びと（詩人）の生きる力（創造力）がどんな方向に流れて行ったかを知ろうとするなら，物語の中にあるファーブラがどんな方法で，またどんな課題をもって作り変えられて，そうした人生の（詩的）シュジェートに形成されたかを見ればよい。

（ヴィゴツキー『寓話・小説・ドラマの心理学』p.108より）

1-2　経験の組織化と意味の行為

心理学者は行動主義の洗礼を受けてきたので，物語や意味という言葉を聞いただけで懐疑的になるかもしれない。そこで，まず「物語」という見方を行為の面から考えてみたい。

人は行動していることを意識しているとは限らないし，行動したことを正しく語るとも限らない。語られた「人生の物語」も，「事実」であるとは限らない。私たち人間の記憶は不確かであり，それを回想する語りも歪んでいる。

そこで，もし理想的な年代記作者がいたらどうだろうか。もし完璧な観察・記録者がいて，私たちが日々していることをすべて自動的に録画・記録できるならば，「客観的」な年代記・伝記ができあがるだろうか。それを見れば，私たちが経験していることをより良く理解できるだろうか。まず，問題になるのは，その記録を見るには，実人生と同じだけの時間が必要なことである。しかし，時間が確保できたとしても，VTR で長々と些末な出来事が次々と継起するのを見るだけで，何かを理解できるだろうか。何らかの編集作業を必要とするのではないだろうか。その編集作業が「物語化」の始まりなのである。

私たちは，外在化された行動（behavior）や事件の総和として存在しているのではなく，一瞬ごとに変化する日々の行動を構成し，秩序づけ，「経験」として組織し，それを意味づけながら生きている。経験の組織化（organization of experiences），そして，それを意味づける「意味の行為」（acts of meaning, Bruner, J.S, 1990）を「物語」と呼ぶことができる。

Macadams, D.P.（1993）はライフストーリー研究の開拓者の１人であるが，彼ら（1998）は，生成世代性（generativity）の概念を，内的動因（inner drive），文化的要請（cultural demand），関心（concern），信念（belief），関与（commitment），行為（action）などに分解し，それら全体を

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

覆い相互連関させるものを「物語り」(narration)による意味づけだと考えている。

個々の要素が同じでも，それをどのように関連づけ，組織立て，筋立てるかによって，人生全体の意味は大きく変化する。その意味づけに，言述が果たす役割を本質的とみなす考え方が物語論の基礎にある。心理学は，短いスパンでの自己の行動の説明や内観は研究してきたが，人生という長い時間軸のなかで人が自分自身の経験をどのように組織するか，どのように意味づけるかという問題を無視しすぎてきたといえよう。この問題に取り組むことは，知のパラダイムと方法論の変換にむすびつくと考えられる（南・やまだ，1994，1996；やまだ・南，1995)。

1-3 時間と物語

理想的な年代記作者という喩えは，さらに「過去」とは何か，記憶とは何か，人間にとって時間はクロノロジカルに積み重なっていくのかという問題を喚起する。

自伝的記憶（Neisser, U. & Fivush, R., 1994；Rubin, 1996；佐藤，1998）や，偽りの記憶（Conway, M.A., 1997）研究が明確にしてきたように，「過去」は記憶庫に固形物のように蓄積され，想起は「過去」をそのままの形で引き出すというわけではない。時間的に後から来るものによって，「過去」は「現在」と照合されて絶えず再編成され，読みかえられて変容していく。

したがって，「過去」は固定されたものではなく，「現在」のなかにある。時の流れには過去も現在もないが，もし人為的に区切るならば，アウグスチヌスが言うように，「過去」「現在」「未来」という3つの時ではなく，「過去の現在」「現在の現在」「未来の現在」にすべきだろう。

Danto, A.C.(1965)は，物語の書き方において，「過去」が「現在」とどのように照合されるかを指摘した。「物語文は，時間的に隔てられ，はっきり区別される2つの出来事E1とE2を照合するが，記述するのは，そのうちの照合される第1の出来事である」。

たとえば，「1717年に『ラモーの甥』の著者が生まれた」と言うとき，この年には，このような言表ができた人は誰もいなかった。『ラモーの甥』が書かれた出来事に照らされるから，第1の出来事，ディドロの出生が再記述されるのである。

科学的説明といわれてきた「因果的記述」も逆説を含む物語文の1つかもしれない。因果的記述は，問題以後の出来事が，問題以前の出来事を変える言述である。「原因である」「始める」「先行する」「ひき起こす」「生じさせる」などは，物語文の特徴である。連続する時間のなかで，何かを「始まり」と記述できるのは，その前の出来事と区切られて，その後の出来事とむすびつける認識にもとづいている。

「時間は物語のしかたで分節される。それに応じて時間は人間的時間となる。逆に，物語は時間経験の諸特質を描き出すにつれて意味を帯びる（リクール)」のである。

ある人の生誕（第1の出来事）地を訪れた人が，「ああ，ここがあの人の生まれた所だ」と認識するとき，その地は誕生後におこったこと（第2の出来事）に照らして意味づけられている。物語の時間は，理想の年代記作者のように順行ではなく，逆行して回帰する。この時間の流れは，物語生成のプロセスで生み出される。

物語の時間は，クロノロジカルな時間とは異なり，逆行したり，回帰したり，循環したり，止まったり，いろいろな流れ方をする。多様な時間軸を設定できることが物語の強みである。物語の時間は，人間の経験する時間に近い。人生を物語とみるアプローチは，多様で多次元の時間軸を扱う視点をひらき，記憶研究にも影響するであろう。

1-4 生成するプロセスとしての物語

リクールは，物語論において筋立て（ミュトス）の構造的調和を強調している。調和は，「完結性」，「全体性（始めと中間と終わりをもつこと)」，「適度な大きさ」の3つによって性格づけられる。

この調和的物語の全体性（始めと中間と終わりをもつこと）を物語の定義にしている研究者は多い。しかし，これはリクール自身が述べているように，人生の経験としての物語を表わす性格ではなく，筋立てに秩序をもたらし調和的にする性格の1つにすぎない。しかも，リクールを含めて多くの研究者は，物語の基本として西欧文化における古典的定型のみを想定しすぎている。ギリシャ悲劇ではなく，能の舞台を考えれば，序破急という性格をもつ物語もありうるし，破調の即興リズムで常に変化しつづけて完成しない別の物語もあるだろう。

そもそも「完結」「完成」という秩序でものを見る見方そのものが，ひとつの発達観，ひとつの物語だったのではないだろうか？人は誰でも死に至るが，人生は，死によって完結・完成すると考えていいのだろうか？いや人生だけではない。生成的に見れば，フィクションとしての物語でさえ完結・完成しないのではなかろうか？

「生成学」(la génétique)の立場に立てば，フィクションとしての物語，作者によって創造された「作品」，「完成品」とされてきた小説でさえ，絶えざる修正と生成による書き変え途上の「草稿」から「草稿」への構成プロセスとみなされる。工藤（1996）によれば，最終稿をふくめ，生成過程のエネルギーをはらんだエクリチュール（書かれたもの・書く行為）のすべてが平等に検討される。なぜ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

なら「書くこと，書き直すことが，完結に向けての直線的な行程とはかぎらない」「死ぬ直前の判断が最終的かつ決定的だという保証はない」からである。

ここでは「生成学」の立場と同様に，「物語」をライフ(生きた，生)の物語，生成する物語，完結しない開かれた物語として考える。そこで，物語の最小限の構成要素として，2つ以上の「出来事」とそれらをむすびつける「筋立る」働きを考えるのである。

さて，以上の議論で，人生の実経験とフィクションとしての物語を一緒にしたことに，問題はないだろうか。河合(1993)など少数の臨床心理学者を除いて，物語や小説は心理学とは遠いものと考えられてきた。しかし，新しい物語論では，フィクションか事実か，芸術的か科学的か，口頭で話されたものか書かれたものかを区別しないで，文学も新聞も事務書類も数式も電子メールも，(広義の)言語で語られたものは，すべて「テクスト」と呼んで共通の地平に立つところから出発する。なお，記号論から発展したカルチュラル・スタディーズ(Turner, G., 1996など)では，メディアやファッション，文化や社会制度や政治も「テクスト」として読む(reading)という，さらなる拡張が試みられている。

1-5 出来事と意味

物語が生成的で完結しないのは，書く行為が，書くことと書き直すプロセスの連続として存在するからだけではない。物語は書き手である作者だけでは完成できず，読者も参与する意味生成の共同行為，「出来事」として読まれるからである。

小森(1996)によれば，「出来事」とは，読者がテクストにかかわることによって，時間が流れはじめ，テクストの空間が現れ，表現者と読者が同時に現れることである。表現者がかつて書きつけた言葉が，読者のなかに入りこむことで，意味生成が発生し，それによって読者のなかにあった言葉が，表現者の構成したテクストのなかに投企される。出来事とは，何か事件がおこることではなく，共同行為としての読むことである。

書き手と読み手の共同行為としての「出来事」のなかで「意味の発生」がみられる。それでは「出来事」と「意味」を同義に考えてよいのかどうか，「意味」とは何かが，次の疑問になる。「出来事」と「意味」をどのように関係づけるかが，「言語行為論」と「解釈論」，どちらに比重をおくかを分けるように思われる。

リクール(1971)は，『解釈の革新』において，「言述における出来事と意味」を区別している。彼は，まず，言語(ラング)の言語学と，言述(ディスクール)の言語学とは，別の規則をもつという。言述は，ことば(パロール)の出来事として現れ，次のような特徴をもつ。

1) 言述は時間的出来事として顕在的にそのつど実現されるのに対し，言語の記号は潜在的で時間の外にある。
2) 言語は主体をもたない—「誰が語るか」という質問は，言語のレヴェルでは有効でないという意味で。それに対し，言述は人称代名詞のような指示詞の複雑な働きによって，それ自身の話者と関係づける。
3) 言語において，記号は同一体系の他の記号にしか関係づけられず，したがって言語は時間性も主観性ももたないゆえに，世界をもたないのに対し，言述はつねに，あることについて述べる。言述は，叙述し，表現し，再現しようとする世界を指示する。言語活動の象徴機能が実現されるのは，言述においてである。
4) 言語は単にコミュニケーションの条件にすぎず，コミュニケーションにそのコードを供給するだけであるのに対し，メッセージが交換されるのは言述においてである。その意味で，言述のみが世界をもつ，というだけでなく，言述だけが〈相手〉を，つまり言述が話しかけられる他者，対話者をもつのである。

彼は，パロールの言語学の立場に立った上で，次に「出来事」と「意味」を分け，「いかなる言述も出来事として実現される。しかし，いかなる言述も意味として了解される」という。「われわれが了解しようとするのは，一瞬に過ぎ去るものとしての出来事ではなくて，持続するものとしての意味である。そこのところをよく理解しよう。そう言ったからとて，われわれはパロールの言語学からラングの言語学へと後もどりしたわけではない。出来事と意味が分節するのは，パロールの言語学においてである。この分節こそ，解釈学にかかわる問題全体の要である」。

「出来事」と「意味」をどう関係づけるかは，難しい問題である。出来事は，入れ子構造をもち，大きな単位でも小さな単位でも起こる。出来事は，それ自体に意味をもつ生成的なものであり，単なる固定した「建築素材」ではない。しかし，個々の出来事は，より大きな筋立てのなかに入れられ，関係づけられることが全体としての意味を生成するから，出来事＝意味ではない。

そこで，私は，最初に書いたように「ストーリー」を「2つ以上の『出来事』を筋立てる行為」と定義し，「むすびあわせる行為」を「意味(meaning)」と呼びたいと思う。

この「意味」は，ソシュール(1960)言語学と，その発展である記号学でいう「意味(signification)」とは区別されねばならない。記号学では，能記(意味するもの signfiant)によって所記(意味されるもの signifié)を読み解くこと，コードを解読することが「意味」である。記号学でいう

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

能記と所記の分化における「意味作用 (signification)」と，その意味作用の連鎖，配列や筋立て，行為の組織化，つまり物語における「意味 (meaning)」とは，意味の次元が異なる。最近の研究では，両方の発展アプローチで，「ナラティヴ・アイデンティティ」など類似の現象を扱うようになっており，今後，両者の関係を問うていく必要はあるが，ここで扱う意味 (meaning) は，記号コードの解読という意味 (signification) ではない。

意味は，時間の流れのなかで，2つ以上の出来事をむすびあわせる物語行為のなかで発生する。「むすぶ」を，個々の出来事が先に実在し，それを紐でむすぶようにイメージしてはならない。個々の出来事は，むすばれ意味化される前には，ひとまとまりの出来事として認識されていなかったのである。したがって，出来事自体も，むすぶ過程で，出来事としてのまとまりを帯びながら意味化されていく。日本語で「むすぶ」は「産すぶ」を意味する。「むすぶ」ことによって，新たな意味が生成されるのである。

要素としての出来事は，文章の筋立てと構造化の過程でまとまるのであり，それを支えるコンテクスト(文脈)なしに，前もって実体として孤立しては存在しえない。文脈を与え，筋書きをつくる行為によって，個々の出来事が組織されると共に意味化される。また，物語を構成するひとつの出来事も物語構造をもち，出来事を構成するひとつの文章も物語構造をもつ。それらの関係は「入れ子」構造からなる。

人生の物語を語る，そのプロットが組み立てられる内的連関は，「論理」ではない。経験としての行為(プラクシス，アクツ)の組立てであることも特記すべきだろう。経験としての行為が意味づけられる，つまり「意味の行為」(acts of meaning) がなされるのである。この「意味」は，「了解」「解釈」とは区別される。「解釈」という言葉は，恣意的にどのようにでも自在にこじつけられる「主観的な意識」と一般に誤解されやすい。「意味」は多義性と自由度をもつが，どのようにでも恣意的に連結できるわけではない。

2 ライフストーリー研究の系譜

2-1 ライフストーリー研究の古典と方法論

ライフストーリー研究の歴史は古く，文化人類学，社会学，医学，心理学，民俗学，文学など多くの学際的領域でなされてきた。

現代につながる記念碑的な古典としては，第1に，精神分析学の創始者フロイト (1895) の『ヒステリー研究』，第2に移民が書いた自伝的資料を分析した社会学のトーマスとズナニエッキー (Thomas, W. & Znaniecki. F., 1918-1920) の『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』，第3には，貧しいメキシコの家族のそれぞれの口頭の語りを羅生門的手法で分析した文化人類学者オスカー・ルイス (Lewis, O., 1961) の『サンチェスの子どもたち』などがあげられる。第2の研究は，オールポート (Allport, G.W., 1942) がパーソナル・ドキュメントの批判的利用の転換点としてあげ，第3の研究は，ラングネスたち (Langness, L.L. & Frank, G., 1981) が最良の古典としてあげている。

古典の著者たちは，いずれも，新しい主題と問いを発見し，新しいものの見方と思想，そして方法論を開拓した。ライフストーリーの手法は，仮説検証よりも，仮説(理論・モデル) 生成的アプローチにおいて，より威力を発揮するといえよう。

新しい理論を生み出すとき，ふつうの人びとの語りに深く耳を傾け，日常知の結晶というべき物語や語りの分析から入った心理学者は多い。先にあげたヴィゴツキー以外にも，ハイダー (Heider, F., 1958) は，『対人関係の心理学』において，常識心理学のエッセンスとして寓話の分析から，「帰属」など重要な心理学概念を抽出した。ピアジェ (Piaget, J.) やエリクソン (Erikson, E.H.) も，子どもとの日常会話から理論化を始めている。論理実証的モードと異なり，物語モードは，物語制作，世界制作にかかわる様式である。心理学の理論構築に貢献した彼らがどのように「物語」の知を利用したかは，今後より詳細に検討すべきだろう。

さて，ライフストーリーは，心理学のもっとも古い手法の1つで，1940年代までは盛んであったが，実験法や質問紙調査法など科学的方法論の発展とともに急速に葬られた。その経過は，現在，新たな眼で批判的に見直される必要がある。

オールポートは，初期の古典として，フロイトの著作とともに，ジェイムズ (James, W., 1901-1902) の『宗教的経験の諸相』とホール (Hall, G.S., 1904) の『青年期』をあげている。オールポートは，個性記述的なパーソナル・ドキュメントの方法論を擁護したが，彼自身の研究は，パーソナリティの類型に終わっている。たとえば『ジェニーからの手紙』では，ひとりの女性が晩年12年間に出した301通の手紙をもとに，種々の理論的立場による解釈の相違を提示した。しかし，個々の手紙の「生々しい語り」と，当てはめられる「概念的な解釈」との乖離は甚だしく，事例の深い理解にも，一般化にも失敗している。どの理論的立場にもコミットしないで，対等に距離をおき中立であろうとする傍観者的な立場をとる科学主義も，「理解」ではなく単なる「概説」に終わる一因であっただろう。この系譜は類型化から数量化へと発展した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

心理学は，ライフストーリーに古くから関心をもってきたが，第1の系譜は，個人差の類型とカテゴリー化，そして質問紙法や評定尺度など数量化による一般化への道を歩んだ。質的データ自体を「分厚く記述する」方法論の格闘（Geertz, C., 1973, 1988）をしないで，その「質」としての長所，「物語」としての価値を生かした一般化への道を磨くことはなく，衰退させてきたといえよう。

一方，第2の系譜，フロイトの方法は異なっていた。彼は，典型的な事例を詳しくとりあげて理論の例示に使った。事例の数は少ないが，深い継続的観察がなされ質は高い。フロイトの事例解釈はひとつのモデルになって再解釈を生み，再々解釈される生成的継承がなされてきた。

それはフロイトの事例が，「単に精神分析について書く分析家の一般の行き方に反し，フロイトはその書いたものにおいて，精神分析的体験の精髄，つまり絶えまない進行と生成を上演し出現させるのであり，ただ単に提示するわけではない（Mahony, P.J. 1987）」からである。読者との共同行為のなかでアクチュアルで生き生きした現場体験としての「出来事」が生成される，そのような「物語」としての価値が高いのである。

それはエリクソン（Erikson, E.H., 1950, 1958, 1969）においても同様である。彼の言葉は，「相手とパートナーシップを作り上げ，そこに入り込む場として使われ，固定された対象に張り付けられる既成のラベルであるよりは，むしろ，名を与え，名を呼ぶことによって，相手を摑み，相手との関係に入る役割をもつ」。「単なる『何かについての説明』ではなく，『感覚を通して直接に生きられた言葉』と成るのを待つことなくしては，言葉を理解したことにならない。各人がそれぞれのアクチュアルな現実のなかで使ってみることによって，はじめて，その本来の意味において理解される道が開かれる（西平 1993）」。

ただし，彼らの解釈は，同じ学派に属し類似の臨床経験をもつ人には，事例が典型として生き生きと機能するが，そうでない人には解釈がこじつけにしか見えない場合があり，日常行為に「深すぎる」解釈を適用する危険性をもつ。

2つの系譜から「類型をつくる素データとしてのライフストーリー」と，「それ自体を典型事例として生かすライフストーリー」の相違が見てとれる。

2つの系譜はライフストーリーだけではなく，その後の多くの質的研究や事例研究がたどった道でもある。質的資料をカテゴリー化や尺度化に役立て数量化に向かうか，あるいは個別事例の例示にするか。現代においても，どちらかの系譜の変奏に位置づけられる研究が多い。

「カテゴリー化」と「事例の例示」，2つの系譜を超えて，第3の道を開拓することはできないだろうか。質は「質」として生かし，モデル構成によって一般化をめざす方法論（やまだ 1986）を，ライフストーリー研究はめざすべきではないだろうか。

2-2　ライフヒストリー（生活史）とライフストーリー（人生の物語）

ライフストーリーは，ライフヒストリーに比べると，学術用語としてはまだ新しく，混同されることが多い。また，同義に使用される場合もある（Atkinson R., 1998；Langness, L.L. & Frank, G.など）。しかし，英語のライフのうち，「人生・生涯」「生活」「生・いのち」「生き方・人生観」のどこに関心をもつか，「生活史」と「人生の物語」では，関心は相当に異なる。用語は自覚的に選ぶ必要がある。

Bruner, E.M.（1984）は，3種類の生を区別した。「生きられた生（life as lived）現実に起こっていること，外的な行動の現れで，第三者によっても把握できるもの」「経験された生（life as experienced）当事者主体のイメージ，感覚，感情，欲望，思想，意味などから成立している。経験は記憶され，回想されることによって新たな経験を生きることになる。私たちは何度も経験を生きる。」「語られた生（life as told）語り手のライフストーリー。語りの行為の文化的慣習，聞き手との関係，社会的文脈などによって左右される」。彼は，第3の「語られた生」をライフストーリーとみなしている。私は，後述する FIGURE 1のように，「語られた生」の一部と「経験としての生」をライフストーリーとみなし，「語られた生」の一部（聞き手との関係，社会的文脈など）を「語り行為」として区別したらどうかと考えている。

文化人類学や社会学では，伝統的にライフヒストリー研究が蓄積されてきた。『ライフヒストリーの社会学（中野・桜井 1995）』では，「語られた生（自分の人生や経験した事柄についての語り）」をライフストーリー，その口述資料を研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ，注記を添え構成したものをライフヒストリー（生活史）と区別している。中野（1977）の『口述の生活史』がその具体例である。この立場では，ライフストーリーは個人史を構成する歴史研究の素材にすぎない。

一方，最近の「ストーリーの社会学」では，ストーリーを語る行為やストーリーの生産や流通そのものに焦点があてられる。プラマー（Plummer, K., 1995）によれば，ストーリーを語る共同行為（joint acts）は，シンボリック相互作用論の核心に位置づけられる。

プラマーは，「レイプ」「カミングアウト」「回復」などのセクシュアル・ストーリーを分析し，それが二十世紀

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

の後半に突如として増殖し，「権力の川を流れて」氾濫したことを見いだした。語っている本人は「自発的」に「自分固有の経験」を語るのだが，ストーリーは政治的力をもち，強力な社会的伝達力をもつ。

それらのストーリーは，現代に突出した新しい語りだが，文学や神話と共通する古典的定型と，驚くほど同じパターンで語られていた。ウラジミール・プロップの「苦難」「危機」「転機」「エピファニー(聖なるものの顕現)」「変身」「生き残り」「克服」や，エルスブリーが見いだした近代のストーリーの5プロット「旅の出発」「争いへの参加」「苦難の忍耐」「目的の達成」「安住の地の建設」などである。たとえば，同性愛者のカミングアウト・ストーリーでは，「私は他の人と違っていた」という初期の回想から始まり，「苦難体験」「敵がつくられる」「ほんとうの自分の姿がわかる」「カミングアウト(外へ現れる)」「安住の地に到着」というストーリーで語られた。

以上のように，「ライフヒストリーの社会学」では，個人の生活史の再構成が目的である。それに対して，「ストーリーの社会学」では，ストーリーの語られ方，共同行為と，その背後の社会システムに重点がある。

Mann, S.J. (1992) は，ライフストーリーは，「ライフヒストリーのうちの他者に対して語られた部分である」(Kotre, 1984)，「相互作用のなかで生成された口述の自叙伝的ナラティヴである」(Bertaux & Kohli, 1984) という定義をひき，ライフヒストリーが人生の歴史的真実を表わそうとしているのに対して，ライフストーリーは，生きられた人生の経験的真実を表わそうとしていると述べている。これが妥当な見解であろう。

2-3 ライフストーリーとナラティヴ心理学

物語る行為には，ナラティヴ (narrative) という語も広範囲に使われる。ライフストーリー研究はナラティヴ心理学と総称され，より大きい範疇ではナラトロジーともいわれる。

ランダムハウス英和辞典では，ストーリーは「物語，話，小説，筋，プロット，逸話，挿話，経歴，素上，報告された話，陳述，うわさ，言い伝え」，ナラティヴは「話，物語，談話，物語本，語り口」を意味する。そして，ストーリーは「話・物語を意味する一般的用語で，実在と架空の両方に用いる」，ナラティヴは「ストーリーより形式ばった語で，想像力に富むというより事実描写の物語」と説明されている。

ストーリーとナラティヴは互換的に使われるが，区別する研究者もいる。たとえば野家 (1998) は，ナラティヴは「動詞的概念で，物語る行為の遂行的概念」をさし，ストーリーは「始めと終わりをもった完結した構造体をさす名詞的概念」だと述べている。

しかし，実際の心理学研究では，story telling (物語を語ること) と narrative や narration は互換的で，野家の区別は一般的ではない。また，野家の「ストーリーの定義」は，リクールのいう物語の「調和」的構造の一性格にすぎず，ストーリーを狭く固定的にとらえすぎである。

「ストーリー」は，固定した静的構造ではない。たとえば「ナラティヴ・セラピー」(小森他，1999；McNamee, S. & Gergen, K.J., 1992；White, 1995) の考え方をみてみよう。そこでは，次のように説明されている。私たちは，人生を生きるとき，自分たちの経験を積極的に解釈しており，明瞭な何らかの枠組みに頼ることなしには経験を解釈できない。その枠組みを構成するのがストーリーである。さらに私たちの生きられた経験のうち，どの側面が表現されるか決定するのも，ストーリー，ないしセルフ・ナラティブである。人を「経験」「意味」「行為」の円環とみなしたとき，「経験」から「意味」へ，「意味」から「行為」へと移行する過程をストーリーが推進すると考える。つまりストーリーは，「レンズ」(世界を見るための媒体)，および「内的モデル」(アイデンティティや行為の導き役) と考えられる。これだけならば，認知療法とあまり変わらないが，このストーリーが個人のなかにあるもの，認知の歪みなどとは考えられておらず，家族をはじめとするさまざまな人びとの相互作用によって，たえず構成されつつあるものと考えるところが違っている。ストーリーによって人びとは行為し，さらに行為によって，そのストーリーが確認されるという円環性が人びとのもつ物語形式であるから，治療には，ストーリーの書き換え(re-storying) や再著述が重要になる。

家族療法から発展したナラティヴ・セラピーでは，ストーリーという用語は，愛着研究における内的作業モデル (internal working model) にも近く，プラグマチックである。彼らは，社会的構築主義 (Gergen, K.J., 1994) の立場から，社会的に構成されたストーリーの変容と改変を強調している。しかし，神話や逸話や昔話など，文化のなかで長年伝えられてきた伝統的な物語やテクスト解釈との連関は考えられていないようである。

以上のほかにも，学際的な関連研究はきわめて多く，生涯発達心理学にかかわる領域では，医療人類学 (Kleinman, A., 1988)，高齢者の人生回顧(Butler, R.N., 1963；Coleman, P.G., 1986)，エスノメソドロジー的会話分析 (Wooffitt, R., 1992)，語りのポリテックス (Rosenwald, G.C. & Ochberg P.L., 1992) などがある。新しい研究も活発で，"The narrative study of lives" (Josseleson, R etc. (Eds.), 1993-) "Journal of narrative and life history" (1992-)，"Storytelling" など専門雑誌の刊行も相次いでいる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

方法的にも多岐にわたる。『ライフストーリー・インタビュー』(Atkinson, R., 1998)と,『ナラティヴ分析』(Riessman, C., 1993)を比較すると，前者では「物語テクスト」，後者では「語り行為」に重点がある。ライフストーリーが今までの認知科学的研究と大きく異なるのは，扱う物語の時間的長さであるが，後者では談話分析(茂呂，1997)の単位に近い。理論的にも方法論的にも大きな幅と多様性があるので，それらを秩序づけていくのはこれからの仕事だろう。

なお，本論で「ライフストーリー」と呼ぶのは，生活に根づいた日常語で，誰でも意味がわかることが第1の理由である。Kotre, J. (1984)は，ナラティヴ心理学の先駆的著書の3章「人生を物語る　life-story telling」において，なぜ「ライフストーリー」という用語を選ぶのかを書いている。彼は，ライフ（人生の），オーラル（口承の），サイコ（心理の）などに加えて，レコード（記録），バイオグラフィー(自伝)，ヒストリー(歴史)，ストーリー(物語)，スタディ（研究）など，多くの組み合わせが可能だが，心理学概念としてだけではなく，日常生活ですべての人々が自分自身の言葉で語るためには，単純な用語が好ましいという。

「ストーリー」は，すべての人が接触できる「引き金」となる日常語である。多くの人々はpsychobiography(心理的自伝）という言葉を聞いたことがないし，誰もcases(事例)とは呼ばれたくないだろう。また，「ストーリー」は，日常語でありながら人生や人間存在の意味の深い層にまで達することができる「鍵」言葉でもある。

今まで積極的に語れなかった人でも，その言葉に「引き金」をひかれて自身の経験を語りはじめ，心の「鍵」をあける用語のほうが望ましい。ライフストーリー研究は，語りが語りをよび，循環的に共同生成されるところに重要な意義がある。ストーリーは，なじみやすい言葉で，日本語としても定着している。

また第2には，ストーリーが，日常的に語られた「話」から，フィクションとしての「物語」，さらに「歴史」とつながる文化的意味の深さと広がりをもつことがあげられる（英語のstoryはhistoryと同語源，仏語のhistoireは物語と歴史の両方をさす)。内包が広いことは，細分化した学術用語としてはマイナスの特性にもなるが，ここではプラスの価値を認めたい。

従来の心理学研究では，フィクションと事実は厳密に隔てられ，両者に橋をかける発想は乏しかった。しかし，両者を区別しつつも，そこに共通する一般的法則を発見しようとする志向性が，人生を「物語」として見る見方である。その見方は，経済学や政治学にもおよび，人文科学と認知科学と社会科学など，従来別々だった領域を学際的にむすびつつある。

第3には，日本語の「物語」「物語る」も，文化に深く根ざした興味深い日常語である。日本語の「もの語る」は，本来は「もの」(霊，鬼，魂，たましい）を「象(かたど)る」(表象する・再現するrepresent)行為であった。また，坂部(1990)がいうように「語る」は，単なる日常会話（話す）とは異なり，「騙(かた)る」(ふりpretending)行為でもあり，個人としてのペルソナを二重化して，ある種の過去次元を現在に喚起する演技的行為でもある。身体と物語は，本質的な部分でむすびつくのである(森岡1994)。「語る」「物語る」という言葉には，アリストテレスがいう身体演技・ミメーシス（再現・模擬行為）とつながる発想がこめられており，心理学的含蓄が深い。

3　ライフストーリー研究がもたらす新しい視点

3-1　論理・実証モードと物語モード

ライフストーリー研究は心理学に新しい視点と方法をもたらす。まず，人生を物語としてとらえる見方は，「それは事実かどうか，本当か嘘か？」という問い方とは異なる問い方によって，「意味の行為」「経験の組織化」に迫るアプローチを切り開くと考えられる。

「それは事実かどうか」という問い方は，今まで多くの記憶研究や目撃証言の研究でなされてきたように，物的証拠や他者の目撃情報と突き合わせて，「証言」が正しいかどうか，事実を正確に反映しているかどうか，どのように歪んでいるかを調べる研究である。

しかし，それとは別の知のありかたが成立する。ブルーナー（Bruner, J.S., 1986）は，論理実証モードと物語モード，2つの認知作用，2つの思考様式があり，両者は経験を秩序だて，現実を構築する異なる仕方であり，お互いに相補的であるが，片方を片方に還元することはできないと述べている。

論理実証モードは，心理学者が用いてきた科学的パラダイムである。「ある出来事についての陳述が，真か偽か？」と問い，そこから，真か偽かを明らかにする条件設定がなされ，実証によってどちらかの答えがみちびかれる。物語モードでは，「2つ以上の出来事が，どのように関係づけられて陳述されるか？」が問われ，出来事がどのような意味連関でむすびつけられるかが問われる。どれが正しいかを決定することが問題ではなく，物語論では，複数の答えが両立しうる。

たとえば論理モードでも，物語モードでも，「事実にかんする陳述」は「因果関係を含む陳述」に転換することができる。しかし，2つのモードでは，因果関係の型が違う。

論理的命題では，「もしもxならば，(then) yとなる」

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

という様式になり，普遍的な真理の条件の探究に向かう。どのような条件（x）であれば，yという結果をもたらすか，という条件分析が行われ検証によって公式化される。

物語では，「王が死んで，それから(then)王妃が死んだ」という様式になり，「王の死」と「王妃の死」の2つの出来事のあいだの意味連関，「裏切り」「悲しみ」「自殺」などが探求される。

物語モードでは，「裏切り」「悲しみ」という2つの意味づけがなされても，どちらが正しいか検証するという方向には向かわない。「王が死んで，裏切りを果たした王妃は罪の意識に襲われ，悲しみのあまり自殺して死んだ」というように，矛盾する意味づけの共存がありえる。

論理-実証モードでは，正か誤かの結論が出るか，証拠不足で結論に達しないかどちらかである。物語モードでは，結論を出すことが目的ではなく，「悲しい」「こっけいな」「不条理な」，いくつもの意味づけがありえて，しかもそのどれでもある意味づけが可能である。

人生は，なぜ「物語」として研究されねばならないか？それは，第1に，私たちがふだん，科学者のような論理-実証モードではなく，物語モードで生きているからである。ピアジェは，子どもを小さな科学者のように描き，論理操作を最高の段階においた。しかし，「ふつうの人びとがふつうにやっていること」を知りたいならば，物語モードによる心理学研究が必要である（やまだ，1999，2000 a）。ブルーナー（1990）は，物語モードによる心理学研究をフォークサイコロジー（民間心理学）と名づけている。それは，ふつうの人びとが日常生活で常識的にやっていることを解明しようとする心理学である。

第2の研究理由は，物語モードが記憶など認知情報処理にすぐれていることである。個々ばらばらの出来事ではなく，意味化（経験の組織化，まとめ方，筋立て化）すると記憶しやすく，語りやすい。知識が物語構造をもつこと，物語化すると記憶しやすいことは，すでに多くの認知研究で示されてきた（Shank, R.C. &Abelson, R.P., 1995など）。

第3には，物語モードでは，出来事と出来事のつながり，移行，生成，変化，帰結など，筋立ての仕方が問題になる。遺伝子と同様に，要素の数は限られていても，結びつきと配列が多様であることによって，多様な形態と意味が生成されうる。物語とは，出来事の筋立てや配列を変えることによって，異なるヴァージョンを生成し，それによって新たな意味生成を行う方法論である。この方法論は，制約の多い人生をいかに可能性にみちた人生に変えるかという課題に役立つ。

第4の理由は，論理-実証モードでは，個別事例の具体性から論理的抽象によって事例を超えて一般化へ向かおうとするのに対し，物語モードでは，「個別の具体性」「日常の細部の本質的顕現」自体を複雑なまま，まるごと一般化しようとし，それをモデルとして代表（represent）させる方向性をもつ。論理的抽象の代表は数学であるが，言語で語られる物語は抽象的になっても人間的現実から完全には離脱できずローカルである（やまだ，1986）。したがって，言語で述べられる物語は，科学法則としては抽象度が低く明快さを欠く。しかし，具体的な意味をもつので，同一化（identification）と模擬（ミメーシス）を促し，人の生き方のモデルになりやすい。人間は数式のまねはできないが，物語のまねはしやすいのである。

第5には，上記の特徴から，自発的なミメーシスの循環を生むような伝達に，物語モードが適しており，コミュニケーションに特に威力を発揮することがあげられる。

第6には，物語モードが論理的知よりも，感性的知にかかわっていることがあげられる。物語による伝達は論理による知識の伝達ではない。人を感動させ，人の気持ちを揺り動かす知のあり方，本居宣長のいう「ものの哀れを知る」という知のあり方に，物語モードは適している。

以上のように物語モードは，人が人に何かを伝達するのに適しており，物語が物語を生む，生と再生の生成的循環を生みやすい。この様式は，第7の理由として人間がライフを「生きる」生態的リズムと合っている。

3-2 共同行為としての物語

人生の物語は，シンボリックな文化システムのなかで語る者と語られる者とのあいだの相互行為として行われる。ブルーナー（1990）は，次のように述べている。

人生の物語は，ある特定の人に向かって語られる時，ある深い意味において，語る者と語られる者との共同の産物である。自己は，実在性というものについてどのような形而上学的立場をとろうとも，語る者と語られる者との間の交渉の中にのみ明らかにされうるのである。.....

人間心理学の中心となる概念は意味にあり，意味の構築にかかわる過程と交渉作用にある。1）人間を知るには，人間の経験と行為が本人の志向状態からいかに作り出されるかを把握しておかなければならない。2）この志向状態の形は，それぞれに特有な文化というシンボリックなシステムに参加することを通してのみ分かるということである（ブルーナー『意味の復権』）

私は，語られた物語（story）と，共同行為（joint acts）としての物語り（story teliing）の関係を，FIGURE 1のように表わしてみたい。語り手と聞き手の相互行為から，ストーリーは生み出されるが，それはその場の状況的文

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

脈によって変化する。したがって，語り手の物語は，語る相手によっても，場の雰囲気や状況によっても影響される。また，語り手と聞き手は，一方的な関係ではなく，対話的関係であり，共に物語生成にかかわる。

物語る（story telling）場面や状況としての相互行為と，語られた物語（story）の出来事として立ちあがる語り手と聞き手との相互行為は，区別しなければならない。バフチン（Bakhtin, M.M., 1959-1961）がいうように，テクストとしての物語は，たとえ眼の前に聞き手がいないときでも，そして語りが声として発せられないときでも，対話的で多声的だからである。

ストーリーは，語り行為として状況的文脈のなかに埋め込まれているだけではなく，より大きい社会・文化・歴史的文脈と生態的文脈のなかに埋め込まれている。これらの文脈は，幾重もの入れ子構造をなしているが，この図では簡単に省略している。たとえば，言語体系，文化の伝統的な物語（伝承，民話，神話など），年，季節，月，日，昼夜などを区切るクロノロジカルな時間や人間の身体リズムなどが，ライフストーリーの生成と深くかかわっている。

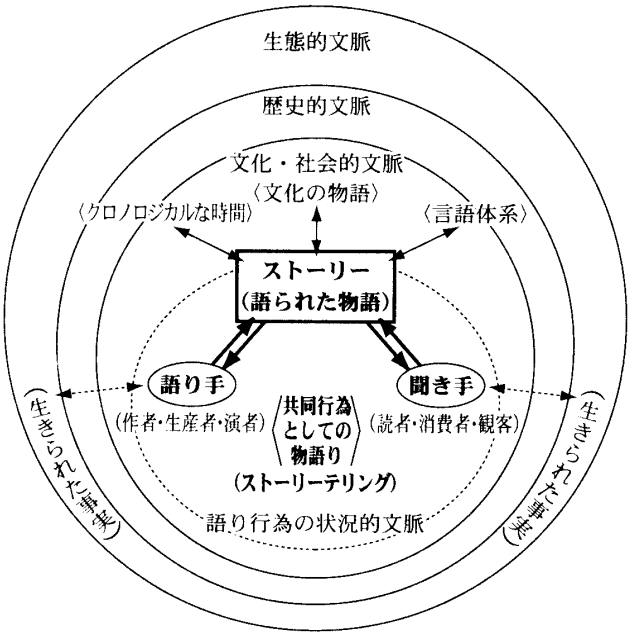

FIGURE 1　物語（ストーリー）と語りの共同行為

3-3　文化の物語と人生の物語の関係づけ

FIGURE 1 に示されているように，物語化のプロセスには，少なくとも四重の意味で文化が関与している。第1には，人間の行為が文化的文脈に埋め込まれていることである。たとえば，「山」を「見る」という単純な行為でさえ，「山」という文化的表象がなければ，「見る」という行動を起こさせないかもしれない。人間が生きるのに，朝夕に「山」を仰ぎ見ることは必然とはいえない。特定の文化に染められていない世界に生きる「素朴」な人間は存在しない。

第2には，言語体系としての文化である。先の文章の「山」「見る」など世界や行為の分節は，言語によって行われている。言語がなくても身体的分節は可能だが，それを何らかの記号で示さなければ，経験として定着させることも，まとめることも，物語ることもできない。言語体系は認識行為と表現行為の両方にかかわる。

第3には，伝統的に受け継がれてきた伝承，神話，民話，寓話，詩，劇など，大量の「文化の物語」が，私たちが自分の「人生の物語」を語るときのモデルとして機能している（やまだ，2000b）。

第4には，文化は物語を生成する文脈であるとともに意味の「解釈文脈」でもある。文化のちがいによって，同じ行為がまったく違った意味をおびる。異文化理解は，自分の物語とは別の物語がありうることを理解することでもある。

「ある人を深く知るということは，世界を構築する異なった方法が，ほんとうに存在していることを認めなければならないのだから，非常に大きな経験をすることになる」。（ラングネス他『ライフヒストリー研究入門』）

3-4　物語は複数の物語を許容する

生涯発達心理学において，「発達段階論」から「人生の物語論」への移行は，発達観の大きな変換になる。

第1の大きな変換は，発達の筋道が1つではなく，幾通りもあることを具体的に示すことができることである。物語は，唯一の真理に支配されるのではなく，多数の多様な筋立ての両立を許容する。いったん物語的見方をとると，なぜ別のストーリーではないかと問うことができる。このような考え方は，可塑性や変化可能性や多様性を強調する多くの生涯発達研究と連動する（無藤・やまだ）。

ただし，物語が複数あることは，どのような物語でも自在に自由につくれるとか，限りない相対化に陥るということではない。事実は逆である。人の想像力には制約があり，人は限られた文化・社会・歴史的文脈のなかで相互作用しながら生きている。先にみたプラマーの分析のように，新しい物語を自由に創ったつもりでも，類似したストーリーを模擬・再現し，反復・循環している現象が逆に発見されるだろう。

ライフストーリー研究は，どのような解釈でも可能な「主観的」な研究ではない。主観的どころか，自分自身がまな板にのせられ，相対化され，メタ化される。教育が「教育という物語」（香川大，1999）として語られ始めたの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

は，そのようなメタ化の試みである。発達理論も，絶対的な真理ではなく，「物語」としてメタ化できる。理論を「物語」としてメタ化する働き，これが第2の変換である。

そのようなメタ化の働きによって，歴史・社会・文化的物語の外へ出られない私たちは，自分自身が，いかにそれらの文脈に埋め込まれて生きており，その中での支配的な語り方（マスター・ナラティブ）に慣らされてきたかが反照的に自覚させられる。その自覚は，今まで自分の声をもたなかった社会的弱者たちが，ジェンダーの物語，障害者の物語，戦争体験の物語，民族の物語など，もうひとつの語り（オールタナティヴ・ナラティブ）を生成し，他者に向かって伝えていく契機となる。物語の複数性にめざめることは，今までとらわれてきた生き方とは別の生き方がありえるし，生き方を変えようとする実践的で生成的な行為を促す。ライフストーリー研究は，人びとの多声性と，それぞれが自分の声で語る行為を大切にはぐくむ。理論が語りを生みはぐくむ生成性と実践性をあわせもつこと，それは，発達論の第3の変換である。

3-5 物語としての自己

リクール（1985）は，「物語的アイデンティティ（identite narrative）」という概念を提出した。彼によると，行為者が「誰か？」という問いは，物語的にしか答えられないという。彼が「自己とは何か？」ではなく，「自己とは誰か？」と問うたことは，問い方の転換，自己論の大きな転換である。リクールは解釈学的現象学の立場に入れられるが，彼の「解釈」という言葉自体が革新されており，通常の意味と異なることに注意しなければならない。解釈とは，今生きている自分との関係において，「その意味は何か？」と常に問いつづける行為だからである。

物語的自己は，物語的統合形象によってつくられるが，たえず再形象化されつづける。物語的自己の概念は，個人だけではなく，共同体にも適用できる。たとえば，イスラエル民族の歴史はテクスト（旧約聖書）に物語られ，そのテクストの物語によってイスラエルの自己同一性の歴史がつくられるという循環から成る。

固有名詞の不変性を支えるものは何か。その名で指名される行為主体を，誕生から死まで伸びている生涯にわたってずっと同一人物であるとみなすのを正当化するものは何か。その答は物語的でしかありえない。「だれ？」という問いに答えることは，....人生物語を物語ることである。

自己性を構成する物語的自己同一性は，生の連関のうちに変化，動性を内包することができる。そのとき主体は，プルーストの決意にしたがえば，自分の人生の読み手である同時に書き手として構成されて現れる。....人生物語は，主体が自分自身について物語るあらゆる真実もしくは虚構の話によってたえず再形象化され続ける。この再形象化は人生それ自体を，物語られる話の織物とする。（リクール『時間と物語III』）

「物語としての自己」の概念は，アイデンティティの概念を物語論へ移行させるとともに，自己観をも変える（榎本，1999；Freeman, M., 1992；Shoter, J. & Gergen, K.J., 1989など）。

第1に，FIGURE 1に示したように，物語は，「相互行為」のなかで語られるので，自己は個では定義されず，本質的に他者に媒介される存在，関係概念とみなされる。「自己」は，個人の内側に閉じたものとして存在するのではなく，他者を媒介とし，他者に向かって物語られる「物語」として存在する。

私たちは，絶えず自分自身についてのストーリーを語っている。たとえば「私はおくびょうだ」と語るとき，それを他者に対してだけではなく，自己に対しても語っている。他者は，眼の前にいる聞き手であるとともに，自己のなかに聞き手として想定されるもう1人の自己でもあり，幾重もの聴衆「他者」に向かう物語りのなかで自己は生成される。

自己が「個」で定義されず，他者を媒介に生成される，あるいは本質的に他者を抱握しているという考えは，現代の多くの哲学に共通する自己観である。

第2には，FIGURE 1に示したように，自己は「文化・社会・歴史的文脈」に媒介されるので，自己の構成に文化や社会や歴史的文脈が本質的にかかわる。自己は，社会的に生成され，文化的に生成される（柏木・北山・東，1997）。

自己が歴史的に生成されるということは，文字通りに，昭和史など歴史のなかで形成されるという意味の他に，生涯発達心理学において特別の意味をもつ。生涯発達心理学は，「時間のなかでの変化プロセス」を扱う学問だから，本質的に歴史的である。それを，自己論におきかえると，自己は固定的で一貫しているとみなす考えほど「個人のパーソナリティとしての自己」観に近く，自己は生きて形を変えていくとみなすと「生涯発達的，歴史的，時間的に変化する自己」観に近い視点となる。

生涯発達的に自己をみれば，過去のなかに，今の自分ではない自分，異質の他者を抱え込んでいる。「大人」の自己は，「子ども」であった過去の自己と同一ではないし，現在においても自分のなかの「子ども」の部分と「大人」の部分，自他の折り合いをつけなくてはならない。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

また，将来にも，今とは違う自分「老人」になる可能性をもつ。自己は「未来」のなかにも，今の自分ではない自分，異質な他者を抱え込むのである。自己を時間的存在，歴史的存在として見るとは，自己が他者になる，あるいは他者が自己になる，変身の可能性を含んだ存在としてとらえることである。

第3には，「物語としての自己」という見方は，自己を「可能性」において見る視点をひらく。ハイデッガー(Heidegger, M., 1927)は，「可能性」こそは，現存在のもっとも根源的な規定性であるといった。現存在の意味を「時間性」のなかで考えれば，自己は事物のように「存在」するものとしてではなく，「みずからを時熟する」生成プロセスにおいてとらえられる。

物語は，過去と現在の自己をむすぶだけではなく，未来の自己，可能性としての自己(possible self)を有機的に意味づけて組織する。やまだ(1997, 1999, やまだ他1999)は，人生の物語研究において，今ここにいる人々だけではなく，亡くなった「不在」の人びととのコミュニケーションや，その後でそれを引き継ぐ人びとが意味生成する「仮定法化された現実」が果たす役割について，「喪失と生成のストーリー」から具体的に考察してきた。物語は，可能世界(possible world)や想定世界(assumptive world)をつくりだすのに，もっとも適した様式である。

われわれは自分のストーリーのまっただ中におり，それがどう終わるかを確かめることはできない。われわれは，新しい出来事が自分の生に加わるごとに，プロットをたえず改訂しなければならない。したがって，自己とは，静的な物でも実体でもなく，個人的なさまざまな出来事を1つの歴史的なまとまりの中に形作ったものである。その歴史的まとまりは，その人がそれまで何であったかということだけではなく，その人が将来何になるのかという期待をも含んでいる。(Polkinghorne, D., 1988)

第4に，「物語としての自己」という見方は，「自己の語り直し(re-telling)」を促し，自己を生成的に変化させる。「ヴァージョンのある話」は，ライフヒストリー研究では，記憶の歪みや語りの相互行為のもたらす偏差として扱われがちであった(中野・桜井，ラングネス他)。しかし，生成的物語観に立つライフストーリー研究では，自己について新たなヴァージョンを生み出すことは，同じ出来事の筋書きを変え，新たな自己の意味を見いだしていく作業である。後に述べるように，人生の物語において，「語り直し」は，単なる繰り返しでも模倣でもなく，生のミメーシス(再現)を循環しながら新たに生成していく，もっとも重要なキーワードのひとつとなる(やまだ，1999，2000a)。

3-6 物語は世代を生成的につなぐ
—generativity(生成世代性)

自己を「物語」としてとらえると，堅い一貫した「自己」，他者と区切られた「自己」という概念はうすくなる。自己は本質的に他者を抱えこんでしか存在しえない。そこで「自己」を物語としてとらえると，「私の物語」を語るほど，逆説的に，プライベートに閉じた「私」という概念が解体されて，自己が公共の場にひらかれていくのである。

「私の物語」を語ることは，「経験の共有者」としての「私たち」を生み出す行為である。物語は話し手と聞き手の共同行為から生み出されるので，自他の共同生成を促しやすい。それは自己を物語のなかで複数化するとともに，自己を他者へとむすびつけ，継承する力をもつ(やまだ，2000ab)。

プラース(Plath, D.W., 1980)が「コンボイ」と呼んだ，同時代を共に生きる自己の人生の同行者は，語り相手，経験の共同生成者，経験の共有者である。人は「私の経験」に閉じない「私たちの経験」の共有者を必要とする。人は，直接に同じ経験をしなかった人に語りかけることによって，相手を「経験の共有者」に変えることができる。

この働きは，同時代だけではなく，世代間コミュニケーションとして行われる。そして，経験を世代を異にする人間に伝える働きこそ，「教育」だといえよう。

ベンヤミン(Benjamin, W., 1932)は「物語作者」において，われわれは，物語ることがもはや場所をもたなくなった時代の終わりにいる。なぜなら，「人々はもはや共有すべき経験をもたないのだから」と述べた。「物語の死」は，ストーリーを語る術が死ぬことでもあり，物語というかたちで伝えられてきた「人びとの経験」が死ぬこと，それが生きた意味をもたなくなることである。

情報の変化が急速すぎて，親の世代の経験が子ども世代に意味をもたなくなる時代に，私たちは生きている。人生を物語ることの意味は，経験をどのように，次の世代，将来の世代に語り継いでいくかという教育の問題として立ち現れる。

人生を物語として見る見方は，人生，歴史，教育のプロセスに生成的に参与することを意味する。物語と人生との関係は，リクールがいうように，ミメーシス(再現・模擬行為，representation)によって循環的になり，人生が物語を再現し，物語が人生を再現する。人生を象どって物語が生成され，その物語に象どられて人生が生きられる，人生と物語とのダイナミックな循環的関係が生起する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

物語は，世界を描写しなおすためのモデルである。物語は人が生きる行為のモデルとしての筋書きを提供し，人の生き方をモデルにして物語の筋書きが作られる。物語を制作するプロセスと，物語を生きるプロセスは，このように循環的に連動するのである。

物語と人生が再現行為によって循環すると考えると，物語は，発達や教育や臨床場面と密接に関係する。たとえば，教育のプロセスでは，先に生きた人びとの人生の物語が，次に生きるものの人生のモデルになる。どのような物語を次世代に伝えたらよいか，どのようにすれば異文化，異世代間の効果的なコミュニケーションが可能かという問題は，物語論的に組み替えられる。

また自分自身がしらずしらず身につけてきた物語を自覚し，再編し，語り直していくプロセスが教育であり発達であり，治療であると考えることができる。人生を「物語」とする見方は，「自己」を「物語」としてとらえ，語り直す（re-telling）ことで，新たな自己を構築していく考え方をみちびく（Shafer, K., 1992）。

物語は「複数の物語の共存」を認め，「語り直し」「編成し直し」「組み替え」「再構築（re-construction）」を可能にする。つまり，自己が生成的(generative)なものとしてとらえられる。同じ出来事でも，筋立てを変え，配列を変えて新しいヴァージョンをつくる方法は，遺伝子(geneは「生成子」と訳すこともできる）の働き方と同じく，生を生成する仕組みであると同時に，知識を世代(generation)を超えて巧みに伝達する仕組みでもある。ライフストーリー研究と，エリクソンのgenerativity(生成世代性)概念が関連づけられるのは，まさにそのためである（Kotre, 1999；Macadams, 1998, 1999；やまだ，1999）。

3-7 物語の共同行為者，参与者，実践者としての研究者

ライフストーリー研究においては，人びとを第三者的に切り離した事物対象としてではなく，共に対話しながら同じ世界に生きる人間どうしであるという，二人称的関係や，参与的なかかわりが要求される(やまだ，1999；やまだ他，1999)。

人生を「物語」とみる見方は，人生を研究する研究者自身も人生の物語と歴史の参与者（participants）であるという，実践的な立場をとらせるのである。人生の物語の研究対象は，「人びとの人生」であるが，研究者自身も人びとの人生を生きる一員であり，物語の共同行為者，共同制作者であることは免れられない。これは，物語研究の弱点だろうか。いや，歴史が動いている現場から離れて，別の場所に立って観想（テオリア）できる，あるいは傍観できると考えてきた学者のほうが幻想を見ていたのではないだろうか（佐伯他，1998；森上他，1995）。

「近代という物語」「進歩という物語」「ミレニアム」という物語の世界制作は，現在進行形ですすんでいる。私たちは物語がオートポエイシス（自動制作）される現場に参与する行為者でありながら，物語を眺めている観察者であり，記述者でもある。物語の全貌は誰にもつかめない。それは，人間の手にあまる大きさであり，私たちは群衆のひとりにすぎない。しかし，歴史が生成される現場の参与者であり，行為者であり，そして歴史に身をもって向かい合う(身交いあう)，そのような生き方こそが，歴史を過去に閉じないで，未来に開き，生成的に歴史という物語のなかで生きる生き方であろう。

エリクソン(1950)は，『幼児期と社会』の前書きに，精神分析学者は，新しいタイプの歴史家であり，「観察する対象に自ら影響を与えて，自分自身が研究している歴史的過程の中に入り，その一部分となる」「『参加者』になることは避けられないし，また避けてはならないのである。それは学問的に体系づけられた参加者の手法でなくてはならない」「この意味で，本書は概念的探求の道程である。また，そうであるべきだと思う」と書いた。

「人生を物語る」，それを学問にしようと志すことは，生身の人間が人生いかに生きるかという問いと切り離さず，現実生活から浮上せず，自分自身の生き方と密着したところで，学問(問うて学ぶ)知のありかたを探求しようと志すことである。そして「人生を物語」と観じる知のあり方こそ，古くて新しい学問の基本なのである。

人生を物語と観じて，よみならふという一種の眼力を錬磨しない者に，人の道を説くことはできない....「世の有さま，人の心ばへをしりて，物の哀をしる」という人生の知り方，人生の「こころ」を知るという知り方が，彼の学問の基本的方法なら，学問は，彼自身に密着せざるを得ないだろう。 (小林秀雄『本居宣長』)

引用文献

Allport, G.W. 1942 *The use of personal documents in psychological science.* Social Science Research Council. 大場安則(訳) 1970 心理科学における個人的記録の利用法 培風館

Allport, G.W. 1965 *Letters from Jenny.* Harcourt, Brace & World. 青木考悦・萩原滋(訳) 1982 ジェニーからの手紙―心理学者は彼女をどう解釈するか 新曜社

Atkinson, R. 1998 *The life story interview.* Sage.

Bakhtin, M.M. 1959-1961 テキストの問題 新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛(訳) 1988 ことば・対話・テキスト 新時代社 Pp.191-239.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Baltes, P.B. 1987 Theoretical propositions of life-span developmental psychology : on the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology* **23**(5), 611-626. 生涯発達心理学を構成する理論的諸観点—成長と衰退のダイナミックスについて 東洋・柏木惠子・高橋惠子(監訳) 1993 生涯発達の心理学1巻 新曜社 Pp.173-204.

Benjamin, W. 1932 *Der erzähler*. 浅井健二郎(編訳) 1996『物語作者』筑摩書房

Bertaux, D., & Kohli, M. 1984 The life story approach : a continental view. *Annual review of sociology*, **10**, 215-237.

Bruner, E.M. 1984 *Text, play, and story : the construction and reconstruction of self and society*. Waveland Press.

Bruner, J.S. 1986 *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press. 田中一郎(訳) 1998 可能世界の心理 みすず書房

Bruner, J.S. 1990 *Acts of meaning*. Harvard University Press. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳) 1999 意味の復権—フォークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房

Butler, R.N. 1963 The life review : an interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65-76.

Coleman, P.G. 1986 *Aging and reminiscence process: social and clinical implications*. Wiley.

Conway, M.A. (Ed.) 1997 *Recoved memories and false memories*. Oxford University Press.

Danto, A.C. 1965 *Analytical philosophy of history*. Cambridge University Press.

Elder, G.H. 1993 *Children in time and place: developmental and historical insights*. 本田時雄(監訳) 時間と空間の中の子どもたち—社会変動と発達への学際的アプローチ 金子書房

榎本博明 1999 〈私〉の心理学的探求—物語としての自己の視点から 有斐閣

Erikson, E.H. 1950(1963) *Childhood and society*. W.W. Norton & Company. (2nd.) 仁科弥生(訳) 1977, 1980 幼児期と社会 I II みすず書房

Erikson, E.H. 1958 *Young man Luther: a study in psychoanalysis and history*. Austen Riggs Center.

Erikson, E.H. 1969 *Gandhi's truth : on origins of militant nonviolence*. W.W. Norton. 星野美賀子(訳) 1973, 1974 ガンディの真理1, 2 みすず書房

Freeman, M. 1992 Self as narrative : the place of life history in studying the life span. In Brinthaupt T.M. & Lipka, R.P. (Eds.) *The self : definitional and methodological issues*. Albany State University Press. 15-43.

Freud, S. 1895 *Studies on hysteria*. Hogarth Press. 懸田克躬(訳) ヒステリー研究 フロイト著作集 第7巻 人文書院

Geertz, C. 1973 *The interpretation of culture*. Basic Books. 吉田禎吾他(訳) 文化の解釈学 I II 岩波書店

Geertz, C. 1988 *Works and lives.-the anthropologist as author*. Stanford University Press. 森泉弘次(訳) 1996 文化の読み方／書き方 岩波書店

Gergen, K.J. 1994 *Toward transformation in social knowledge*. Sage Publication. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀(監訳) 1998 もう一つの社会心理学 ナカニシヤ出版

Hall, G.S. 1904 *Adolescentce (2 vols.)* Appeleton.

Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. 大橋正夫(訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房

Heidegger, M. 1927 *Sein und zeit*. 原佑也(訳) 1971 存在と時間 中央公論社

James, W. 1901-1902 *The varieties of religious experience : a study in human nature*. Modern Library Edirion. 桝田啓三郎(訳) 宗教的経験の諸相 上下 岩波文庫

Josseleson, R etc. (Eds.) 1993- *The narrative study of lives*. vol. 1- Sage Publications.

香川大学教育学研究室(編) 1999 教育という「物語」 世織書房

柏木惠子・北山 忍・東 洋 1997 文化心理学 東京大学出版会

河合隼雄 1993 物語と人間の科学 岩波書店

Kleinman, A. 1988 *The illness narratives : suffering, healing and the human condition*. Basic Books. 江口重幸他(訳) 1996 病いの語り：慢性の病いをめぐる臨床人類学 誠信書房

小林秀雄 1977 本居宣長 新潮社

小嶋秀夫(編) 2000 人間発達と心理学 金子書房 (印刷中)

小森康永・野口祐二・野村直樹(編) 1999 ナラティヴ・セラピーの世界 日本評論社

小森陽一 1996 出来事としての読むこと 東京大学出版会

Kotre, J. 1984 *Outliving the self*. W.W. Norton &

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Company.

Kotre, J. 1999 *Make it count : how to generate a legacy that gives meaning to your life.* The free press.

工藤庸子 1999 草稿を読む 川本皓嗣・小林康夫(編) 文学の方法 東京大学出版会 Pp.193-212.

Langness, L.L., & Frank, G. 1981 *Lives : an anthoropological approach to biography.* Chandler & Sharp Publications. 米山俊直・小林多寿子(訳) ライフヒストリー研究入門 ミネルヴァ書房

Levinson, D.J. 1978 *The seasons of a man's life.* Alfred A. Knoff 南博(訳) 1992 ライフサイクルの心理学 上下 講談社

Lewis, O. 1961 *The children of Sanchez : autobiography of a Mexican family.* Randam house. 柴田稔彦・行方昭夫(訳) 1969 サンチェスの子供たち みすず書房

Macadams, D.P., 1993 *The stories we lived by.* Morrow.

Macadams, D.P., & Aubin, E.S. 1998 *Generativity and adult development.* American Psychological Association.

Macadams, D.P. 1999 The generative self and its relation to future generation. Paper presented at the 10th conference for the integrated study of future generations. Kyoto.

Mahony, P.J. 1987 *Freud as a writer.* Yale University Press. 北山修(監訳) 1996 フロイトの書き方 誠心書房

Mann, S.J. 1992 Telling a life story : issues for research. *Management education and development,* **23** (3), 271-280.

McNamee, S., & Gergen, K.J. (Eds.) 1992 *Therapy and social construction.* Sage. 野口祐二・野村直樹(訳) 1997 ナラティヴ・セラピー—社会的構築主義の実践 金剛出版

南 博文・やまだようこ 1994 人生を物語ることの意味1—生涯発達をとらえる視点・方法を求めて 日本発達心理学第5回大会論文集, 77.

南 博文・やまだようこ 1996 人生を物語ることの意味3—場所の語りと語りの場所性 日本発達心理学会第7回大会論文集, S25.

南 博文・やまだようこ(編) 1995 老いることの意味 金子書房

森上史朗他 1995 物語るものとしての保育記録 発達, **64**, 1-42. ミネルヴァ書房

森岡正芳 1994 緊張と物語—聴覚的統合による出来事の変形 心理学評論, **37**, 494-522.

茂呂雄二(編) 1997 対話と知—談話の認知科学入門 新曜社

無藤 隆・やまだようこ(編) 1995 生涯発達心理学とは何か—理論と方法 金子書房

中野 卓 1977 口述の生活史 御茶の水書房

中野 卓・桜井 厚 1995 ライフヒストリーの社会学 弘文堂

Neisser, U., & Fivush, R. (Eds.) 1994 *The remembering self : construction and accuracy in the self-narrative.* Cambridge University Press.

西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会

野家啓一 1998 歴史と終末論 岩波書店

Plath, D.W. 1980 *Long engagements : maturity in modern Japan.* Stanford University Press. 井上俊・杉野目康子(訳) 1985 日本人の生き方 岩波書店

Polkinghorne, D. 1988 *Narrative knowing and the human sciences.* SUNY Press.

Plummer, K. 1995 *Telling sexual stories.* Routledge. 桜井厚・好井裕明・小林多寿子(訳) 1998 セクシュアル・ストーリーの時代 新曜社

Riessman, C. 1993 *Narrative analysis.* Sage Publications.

Ricoeur, P. 1971 *Evénement et sens dans le discours.* 久米博(訳) 1985 言述における出来事と意味 解釈の革新 白水社 Pp.46-63.

Ricoeur, P. 1983, 1984, 1985 *Temps et récit. I II III* Éditions du seuil. 久米博(訳) 1987, 1988, 1990 時間と物語 I II III 新曜社

Rosenwald, G.C., & Ochberg R.L. (Eds.) 1992 *Storied lives : the cultural politics of self-understanding.* Yale University Press.

Rubin, D.C. (Ed.) 1996 *Remembering our past: studies in autobiographical memory.* Cambridge University Press.

佐伯 胖・宮崎清孝・佐藤 学・石黒広昭 1998 心理学と教育実践の間で 東京大学出版会

坂部 恵 1990 かたり 弘文堂

佐藤浩一 1998 「自伝的記憶」研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **47**, 599-618.

Saussure, F. 1960 *A course in general linguistics.* 小林英夫(訳) 1972 一般言語学講義 岩波書店

Schafer, R. 1992 *Re-telling a life.* Basic Books.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Schank, R.C., & Abelson, R,P. 1995 Knowlege and memory : the real story. In Wyer R.S. (E.d.) *Advances in social cognition*. Vol.8, 1-85. Lawrence Erlbaum.

Shoter, J., & Gergen, K.J. 1989 *Texts of identity*. Sage.

高橋惠子・波多野誼余夫 1991 生涯発達の心理学 岩波新書

Thomas, W., & Znaniecki, F. 1918-1920 *The Polish peasant in Europe and America. 5 vol.* 桜井 厚(部分訳) 1983 生活史の社会学―ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民 お茶の水書房

Turner, G. 1996 *British cultural studies: an introduction*. Routledge. 溝上由紀他(訳) 1999 カルチュラル・スタディーズ入門 作品社

Vygotsky, L. 1968 峯俊夫(訳) 1982 寓話・小説・ドラマ その心理学 国文社

Wertsch, J.V. 1991 *Voices of the mind : a sociocultural approach to mediated action*. Harverd University Press. 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子(訳) 1995 心の声―媒介された行為への社会文化的アプローチ 福村出版

White, M. 1995 *Re-authoring lives. : interviews & essays*. Dulwich Centre Publication.

Wooffitt, R. 1992 *Telling tales of the unexpected : the organization of factual discorse*. Harvester Wheatshef 大橋靖史・山田詩寿夫(訳) 1998 人は不思議な体験をどう語るか 大修館書店

やまだようこ 1986 モデル構成をめざす現場(フィールド)心理学の方法論 愛知淑徳短期大学研究紀要, **25**, 31-51. (やまだようこ(編) 1997 現場(フィールド)心理学の発想 新曜社 Pp.161-186)

やまだようこ 1997 いない母のイメージと人生の物語 濱口惠俊(編) 世界のなかの日本型システム 新曜社 Pp.281-300

やまだようこ 1999 喪失と生成のライフストーリー 発達, **79**, 2-10.

やまだようこ(編) 2000a 人生を物語る1―生成のライフストーリー ミネルヴァ書房 (印刷中)

やまだようこ 2000b 死にゆく過程と人生の物語 カール・ベッカー(編) 終末期医療はどうあるべきか 法蔵館 (印刷中)

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤野志穂・堀川 学 1999 人は身近な「死者」から何を学ぶか―阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより 教育方法の探究2, 61-78, 京大教育学研究科

やまだようこ・南 博文 1995 人生を物語ることの意味2―長い時間軸を重ねて見えてくるもの 日本発達心理学会第6回大会論文集, S28.

NII-Electronic Library Service